

床化)するようになったのである。それらの絶対数が増加してきたわけではなく、むしろ逆にちがいない。

レイナー先生の教室は騒然としていて、ときには取っ組み合いが起きる。それでいながらわが国で問題になっているような、いわゆる「学級崩壊」には至らない。先生の「中年の拳」と教卓にある「細い杖」とが教室の秩序を崩壊から護っている。

「静かに！」と先生は、目の前の四十の顔にどなった。「こんど話をしたものは杖をくれてやるぞ」

その言葉に、クラスはしんと静まった。

誤解なきようつけ加えるなら、これは「体罰」是非論の問題ではない。レイナー先生は、授業中に女店員に見とれるなど文科省的には「教師の鑑」ではなからうが、そんな振舞いをも含めて中年男としての生活者のな(多少くたびれたものかもしれないが)年輪を備えていて、それがプライベートのような知的ではなくても生活的な悪ガキに対して力

(権威)となりえているのである。

レイナー先生の教室に較べたら、ずっとおとなしい生徒たちのわが国の学校で学級崩壊が起きやすいとすれば、私たちの社会において教師が

中村雄二郎著

『臨床の知とは何か』

発達(障碍)臨床において、子ども

ものさまざまな発達能力がどの程度なのかを知る術は、多くの発達検査の開発によりずいぶん精緻になってきた。検査手技の開発により、子どもの能力発達の理解はたしかに一定の進歩を見せている。そのおかげで、どのような能力がいつ頃獲得されるか、われわれの知識はずいぶんと豊かになった。

しかし、そうした能力がどのような形で獲得されていくのか、その獲得過程がどのように展開していくのか、ということについては、いまだほとんどわかっていない。日々の生活の営みのなかで、子どもは他者との間でどのような交流を体験しているのかをダイナミックに把握するこ

しかるべき権威として教室に立つことが、とても困難を強いられているためだと思う。

滝川一廣

とは至難の業である。

臨床の場で、実際には、われわれも直接的あるいは間接的に子どもとのあいだでさまざまな次元で相互に影響を及ぼし合っているにもかかわらず、これまで学問の世界では、観察する側のわれわれは透明な存在とみなし、あくまで子どもを観察対象として客観的に捉えることが大切であることを是としてきた。

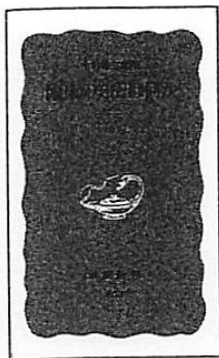
しかし、実際の発達臨床の場でわれわれと子どもとの間で何が起きているか、つぶさに捉えていくと、どのように理解したらよいか困惑するエピソードに遭遇することは珍しい。子どもの世界の把握の仕方がわれわれと大きく異なっていることに気づかされる。

一歳になったばかりで愛着の問題を主訴に連れられてきたT男は、母子関係の修復に焦点を当てた援助によつて急速に改善を示し、自分を積極的に主張するようになってきた。一カ月後のセッションの時である。

T男は楽しそうに歩き回っている時にはずみで転び、額を床に強く打ちつけてしまった。そばにいた筆者がT男を抱き上げたが、T男はむずがってすぐに下り、母親のほうに寄り、母親に抱かれてすぐに穏やかになった。ただ、次にとつたT男の行動を見て筆者は大変驚かされた。

抱かれていた母親からすぐに降りて、さきほど額を打ちつけた床のところまでわざわざ行き、さもわざとらしく床に額を打ちつけ、額をおもむろに上げていく。母親がそばに寄っていくと、母親に向かって手を差し出し抱っこを要求する。そのあと、ふたたび母親から降りて、床に額を打ちつける、というより、先ほどよりもさらにゆつくりと額を床にくっつけ、ニコニコしながらこちらのほうを眺めていたのである。

筆者が出会った当初は、母親に甘えたくても甘えられない葛藤から頻りに頭を壁に打ちつけていた。母子



岩波新書、1992年
本体534円（当時）

関係が修復されてT男は母親に盛んに甘えるようになった頃の出来事であった。T男が床に頭を打ちつけた時は痛みを感じたであろうが、その瞬間、周囲の大人が一斉に彼のほうに注目して大丈夫かと声をかけていた。T男にはその時に浴びた視線や母親に抱っこされたことが、いたく心地よかつたのであろう。もう一度心地よかつた体験を再現したくて、なかばわざとらしく頭を床に打ちつけたと推測されたのである。

「頭を床に打ちつける」という一見不可解な行為のもつ意味を理解するためには、T男がその行為をどのような文脈の中で体験したのか、さらにはその際どのような情動体験をしたのかをわれわれも体験的に理解することがどうしても必要になる。まさにT男独自のきわめて私的な体験がこのような行為によって示されている。体験世界総体をアクチュアルに共有することによってT男の行

為の独特の意味が初めて解き明かされるのである。

従来の発達障害臨床であれば、やもするとT男が見せた行為は他碍あるいは行動障害とみなされ、いかにしてこのような負の行動を修正していくか、といった視点から治療教育的な働きかけが行われやすい。T男のとった行為の意味は、彼の行為のみを抽出して対象化することによって理解することは不可能であつて、その行為がなされた実際の状況、場所といった文脈を共に体験的に捉えることによって初めて可能になることがわかる。

これまでの（近代）科学の世界が、「普遍主義」「論理主義」「客観主義」の三つを構成原理として、人間にかかわる多くの事象を要素的に取り出し、操作的に対象化してきたことを著者中村は鋭く批判し、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちを読み取り、捉える働きをする「臨床の知」を本書で提唱しているのは、今ではよく知られている。近

代科学に対比する形で、「臨床の知」は「コスモロジー」「シンボリズム」「パフォーマンス」の三つを構成原理とするという。

「コスモロジー」とは、場所や空間を普遍主義の場合のように無性格で均質的な拡がりとしてではなくて、一つ一つが有機的な秩序をもち、意味をもった領界と見なす考え方であるが、筆者が先に示した臨床場面での印象的なエピソードは、T男にとってこの時の場所や空間、さらには他者の存在などすべてが未分節な形でひとつの意味をもって体験されていることがわかる。

四歳の時、自閉的で常同的で奇異な行動が目立つということで相談に訪れた自閉症児との出会いでも、非常に印象的なことを体験した。

援助開始後三ヶ月を経過した頃、四歳になったM男は体調が悪く、幼稚園に行きたがらなかった。母親がどうしようかと迷っていると、「ホウチョウ（包丁）！ 行クネ」と母親に訴えた。彼が発した「ホウチョウ」ということばは、母子ユニット（MIU）で彼が気に入っていたままと遊びの際に、野菜を包丁で切

って楽しんだ体験を反映していた。その頃、M男はとても母親に甘えてくるようになるとともに、母親が台所仕事をしていると、それを見て自分も真似するようになっていた。

まもなくM男のことばの使い方に興味深い変化が見られるようになって、「ホウチョウ」というせりふをいろいろな場面で用いることに母親は気づき始めた。風邪をひいた時に、具合が悪く心細いのか、「ホウチョウ」と母親に何度も訴えかけていた。この時には、心細いことを訴えていたが、幼稚園に行きたくない時には、激しく強い調子で「ホウチョウ！」とさも嫌そうに泣きながら訴える。MIUに行きたいことを訴えているのだからと母親はいうのである。外で母子二人たっぷり遊んで車で帰ろうとしていると、突然うれしそうに、にこにこ顔で「ホウチョウ」と言いながら母親に笑いかけ、母親はそうね、楽しかったね、と応答してやるとうれしそうに笑う。今日は楽しかったことを言いたかったのだからと母親は説明した。自閉性障害をもつM男の心の動きが母親にも肌で感じ取られるようになった頃の変化である。まずはM男

の心の動きに変化がみられ、それがこのような発声の質的な変容をもたらしたのであろう。ことばの表現型としては一見同じことの繰り返しに見えるが、実際の発語の際の声の調子やその発せられた文脈の違いによって、そのことばの意味するものは多様性を孕んでいる。このように、ことばが生まれる原初の段階において、一見同じような表現型をとる発語に多様な意味が孕まれていることを教えられる。

「臨床の知」において第二の構成原理とされる「シンボリズム」とは、物事をそのもつさまざまな側面から、一義的ではなく、多義的に捉え表す立場であるが、M男の「ホウチョウ」という至極単純で繰り返されることばにも、いかに多義的な意味があるかわかる。

発達論的視点に立った時、このような印象深いエピソードのもつ意義を検討しようとすれば、臨床の一方の当事者であるわれわれ自身も、直接的関与者として子どもの心の動きをみずから肌で感じ取ってかかわり合うという主体的な営みの姿勢が不可欠である。なぜならこれらのエピソード

ソードの意味的理解は、われわれ養育（療育）にかかわる者が（間主観的に）感じとったことを手がかりにして子どもとかわり合うという姿勢抜きには考えられないからである。このようなわれわれ自身の主体的なあり方そのものの重要性が、「臨床の知」の構成原理の第三に取り上げられている「パフォーマンス」とも密接に関連している。

人間の精神発達には未分化な原初の段階から、次第に分化と統合へと進んでいく過程として捉えることができる。本来ならば原初の段階から急速に身体機能のみならず精神機能も機能分化を遂げていくが、乳幼児期早期から対人関係の成立に深刻な難しさを抱えている自閉症の人々は、加齢を経ても原初の段階に踏みとどまっていることが多い。

そこでいかに原初の段階から先の段階へと育んでいくか、このことが自閉症の人々に対する支援の基本となるが、原初の段階での対人関係を育むことによって、先に述べたようなダイナミックな発達過程が展開しているのである。われわれ自身の存在をも含み込み、子どもとのダイ

ナミックな交流を視野に入れた発達障害臨床において、子どもが見せた多様な変化の発達論的意味を探ろうとするならば、「コスモロジー」「シンボリズム」「パフォーマンス」という「臨床の知」の構成原理が非常に大きな意義をもっていることを痛感する。

量的研究か質的研究か、エビデンスかナラティブか、人間理解を目指す科学の世界にあって多くの議論が

ウエンディ・ボークほか著（藤川洋子、小澤真嗣監訳）

『子どもの面接ガイドブック 虐待を聞く技術』

沸き上がり、質的研究を強調する者にとつて、本書「臨床の知とは何か」はバイブルのように必ず引用されるほどの名著である。今さら筆者がこのコーナーで取り上げるのも気がひけるが、発達論的観点から再度本書を吟味した時、本書の輝きがよりいっそう増すように思われるがゆえに、あえて紹介した次第である。

小林隆児

この本は、あたかも一般的な面接について書かれているかのごときタイトルになっているが、実は司法面接について書かれたガイドブックである。サブタイトルに「虐待を聞く技術」とあるが、これも実は正確ではなく、中身を一読すれば明らかのように、性的虐待の事実の認定に限定的特殊な面接（司法面接 forensic interview）であり、一般的な虐待を対象とするものではない。

主としてアメリカ合衆国において、性的虐待が噴火を起こした一九八〇年代後半になって、性的虐待の事実に関する多くの論争が起きた。性的虐待は他の虐待に比して圧倒的に証明が困難な虐待である。アメリカ合衆国では子ども虐待の蔓延に対して刑事罰や非常に強い社会的制裁（失職や軍人恩給などの停止を含む）を伴う対応を選択したということもあって、性的虐待について白黒をつける必要に迫られた。